

臨済宗の知恵と宗教の異化について

中国仏教協会副会長、河北省仏教協会会長 明海

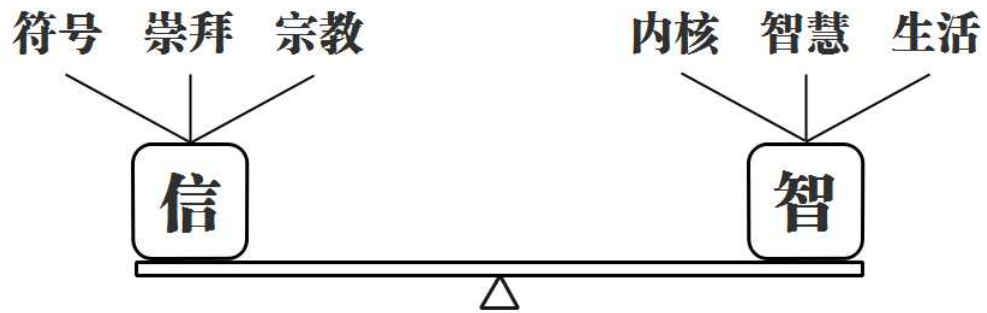
一

異化 (alienation) はここで哲学の概念であり、物事 (人) が本来の位置からの逸脱と疎離、さらに背離ということである。世界の諸宗教は創設の後、遙かな時空間を越えて、伝承するときにすべて同じ挑戦に面している。つまり、異なる時空環境に適しようとすると同時に、元来の基本宗旨から歪曲されないように保有しようとするのである。宗教の元来の基本宗旨が歪曲・改造されてきたということは一つの宗教の全体あるいはその中の一つの教派で起こり、また随時的にどこかで宗教者の自身において起こる可能性があるだろう。これを「宗教の異化」と定義したい。

「宗教の異化」を一つの観察点にすれば、諸宗教が制度設計に付した工夫をはっきりと理解することができるし、時空や環境に適しようとする事と異化を抵抗しようとする両者の間であわらした張力が見えてくる。「元の教旨に復帰する」という努力は宗教の中で新規宗派を生み出すことができる。また、「元の教旨」における解釈権は各宗派の争いの元になる。「元の教旨」を守ることと「宗教の異化」を抵抗する努力はかえって宗教異化増加の原因になるのである。このような困境に直面している宗派が多くある。経済のグローバル化と文化の多次元化の今日では、宗教の異化により宗教間の紛争や宗派間の衝突をもたらされ、さらに世界の平和と安寧を損なうことにもなるのである。

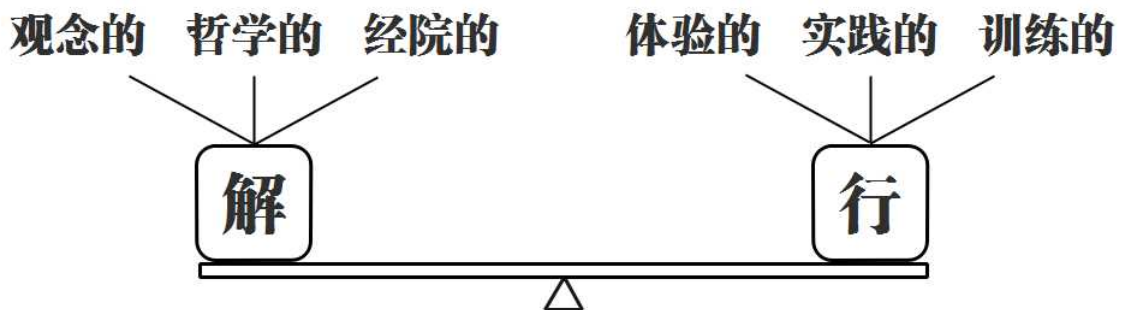
仏教が広大でながい時空の中で伝播されてきたこと自体は強い適応性と柔軟性を呈し、一方では仏経教義の核心宗旨の安定性を守ることができた。割とうまく「宗教の異化」問題を解決したといえよう。これは異なる指向の二重構造があるからである。この二つの部分は歴史てき変動の中で常に適切な張力とバランスを保つことができる。これから、下記のようにつりあいのような平衡関係で仏教内部の有機的な構造を述べていきたい。

1.



1. 符号、崇拜、宗教 「信」 —— 内核、智慧、生活 「智」

信と智とのバランスについて。信は感情的で、智は理性的である。信仰上の必要性から、仏教も仏像仏塔などのような信仰符号を対鏡にすることもあれば、礼拝やお線香を供えるなど信仰の儀式もある。これらのものは仏教を宗教としての形態と象徴になす。神様により啓されている宗教に対して、仏教は智慧を重視している。これは仏教の宗教的手段の核心であり、直接的に我々の生活に影響を与えている。



2.

観念的 哲学的 経院的 「解」 —— 体験的 实践的 訓練的 「行」

2. 解と行とのバランスについて。仏教の核心は智慧である。智慧を現したとき、伝えるときに哲学的なロジックと概念を使わねばならない。中には一シリーズの観念体系が含まれている。この意味では仏教を「哲学」と見なされている。仏教の核心てき価値については、もし概念による観念解釈の面に留まると、他の哲学とは区別はできないといえよう。でも、仏教はこれだけでなく、その概念体系は仏教の最終てき目標にならない。仏教教法の概念体系は仏陀が

菩提樹の下で悟った経験から出てきている一方、我々が一シリーズの訓練と実践を通して悟る境地に入ることを導いてくれるのである。この面では文字概念観念は最終的に乗り越えられるのである。

3.



接触性 独特性 閉鎖性 「教」 — 開放性 包容性 適応性 「法」

教と法とのバランスについて。教の行いは必ず具体的な社会空間の中で表し、そして、社会の実体存在になり、接触することができるのである。また、自分が他の宗教他の文化実体と区別できる。そして、自分の個性を表現する。一列の制度と外在的な形によって、他に対して自分が「這一個」であるとはっきりとあらわされる。これは三つ目の釣り合いの左側の「接触性、独特性と閉鎖性」のいみである。もしも、「教」を「容器」に喩えると、「法」はその容器の中にある「珍宝」である。もしも教は解釈できれば、法はその解釈されたものである。法の中では、經典、概念は解釈できるものである。その解釈したものは全人類の生活と世界であり、人類のすべての物心両面の存在である。だからこそ、その解釈したものは最大な開放性と包容性、そして異文化の環境においてもその適応性を示されている。

上記のような三つのつりあいから、仏教は宗教とした宗教の異化を避けるときの特徴を観察することができた。ある時期、ある教派、ある人が釣り合いの一方てきに偏る可能性が考えられるが、仏教全体の構造においては釣り合いの左右両側は左か右への適当なコントロールを呈している。世界の各宗教の歴史を見ると、宗教の權威性、神聖性や安定性から宗教の異化は釣り合いの左側に

偏ることは多く見られる。すなわち、左側の部分は絶対化され、認められ、「宗教てき自我」になり、極大的な排他性ないし極端主義的なものがでてくる。

「直指人心、見性仏成」を宗旨とする禅宗は容赦なく宗教符号がもつとも弱化した仏教伝承であり、仏教の内部からつりあいが左側へ偏ることを防ぐより重要な力である。その主な意味は諸宗教の手段を取ろうとする気持ちを持たずに直接に仏さまと同じ心性を持つようにしたわけである。宗教的手段というのは経典、仏像、身ぶりないし文字のことを指す。これらの手段と符号は月さまを指す指のことを喩えられている。これらのものは目的にならなく、その上に生まれた各種の「自我」でもない。これらのものを乗り越えて直接に真理である月様自身に到達するのである。仏教の内部生態の中で、禅宗はまるで清涼剤と鎮静剤のような存在であり、宗教への熱狂と宗教の教条化などのような宗教の異化現象の出現を阻止したのである。

私たちは臨済宗の開祖である義玄禅師の開示の中に、宗教てきな束縛と執着から大解脱の智慧を得るように役立つことを示されている。

二

臨済禅師は仏法を修学した若い時代に、仏教を宗教てき手法とした全てを極めたと言えよう。つまり上記した釣り合いの左の部分は、後に黄檗禅師会下に来たからこそ、はじめて直指人心とあらゆる宗教の束縛から脱却した向上の一路を指すのであろう。

「只だ山僧が如きんば、曾て毘尼の中に向って心を留め、経論に於いても尋討す。後に方に是れ救済世の薬を知って、之の説を表顕す。亦た曾つて経論に於て尋討す。遂に乃ち一時に抛却して、即ち道を訪い禅に参ず。」(『古尊宿語録』中華書局 1994年 P65)」

黄檗禅師は三回の棒喝により大悟してから、「原来仏法に多子無し」と嘆いた。「多子無し」とはもとよりあるもので、目に触るとそれはそれであり、他に求める必要はないということである。

宗教の創設は教祖崇拜によるものである。さらにそれはある宗教の核心になったのである。でも、仏教はこれを無限に拡大しなかった。仏陀は「神核」からの偉さではなく、円満的に真理への覚悟を完成したからである。このような覚悟の可能性と機会はあらゆる人に対しては平等的である。この意味では仏は奇特的ではなく、虚名に過ぎない。それで臨済禅師がいわく：

「道流、你若し仏は是れ究竟なりと道わば、什麼(なに)に縁(よ)ってか八十年後、拘尸羅城の双林樹の間に向いて、側臥(そくが)して死し去る。仏は今何(いづく)にか在る。明らかに知んぬ、我が生死と別ならざることを。你言う、三十二相八十種好は是れ仏なりと。転輪聖王も応(まさ)に是れ如来なるべきや。明らかに知んぬ是れ幻化なることを。(中略)道流、真仏は無形、真法は無相。汝は祇麼(ひたす)ら幻化(げんけ)上頭に、模(も)を作(な)し様(よう)を作(な)す。設(たと)い求め得る者も、皆な是れ野狐の精魅、並びに是れ真仏ならず。……。」

(『古尊宿語録』中華書局 1994年 P64)

臨済禅師が人々の宗教施設とした「形相仏」への執着を批判して、(趙洲禅師と同じような)「真仏」ということを提出した。では、真仏はどこにいるのか。

「你が一念心上の清浄光、是れ你が屋裏の法身仏なり。你が一念心上の無分別光、是れ你が屋裏の報身仏なり。你が一念心上の無差別光、是れ你が屋裏の化身仏なり。此の三種の身は、是れ你が即今目前聴法底の人なり。」(『古尊宿語録』中華書局 1994年 P58)

「仏」はここで人々の生命の中に溶け込まれ、人々に本来持つべき生命品質となり、誰でもその真実を発見・実践する機会に恵まれるわけです。臨済禅師がこのように開示した。「意麼処か有り、只だ道流が一切馳求の心歇むこと能わずして、他の古人の閑機 境に上す。」(『古尊宿語録』中華書局 1994年 P58)

彼はさらに「奪」という手段を以て、仏教の中における「神聖対象」への執着を砕き潰そうする。「道流、山僧が見処を取らば、報化仏頭を坐断し、十地の満心は猶(な)お客作兒(かくさじ)の如く、等妙の二覚は担枷鎖の漢、羅漢辟

支は猶お廁穢の如く、菩提涅槃は繫驢楸の如し。」(『古尊宿語録』中華書局 1994 年 P 58)

宗教の神聖性は教主を立てることにある。もっとも重要なのは経典の中に記録した教義である。教義は文字と理論の形であわらし、その宗教の世界観や人世観および価値観を論述する。この宗教の部分は歴史上では経院哲学と宗教教条を容易く形成するようになってきた。それはその異なった解釈によっての各教派間の紛争を引き起こす原因となる。臨濟禪師が仏教の「法」と呼ばれるこの部分について、下記のように述べた。

「云(い)何(か)なるか是れ法。法とは是れ心法。心法は形無くして、十方に通貫し、目前に現用す。人は信不及にして、便乃(すなわ)ち名を認め句を認め、文字の中に向って仏法を意度(いたく)せんと求む。天地懸(はる)かに殊(こと)なる。道流、山僧が説法は什麼(なん)の法をか説く。心地の法を説く……」(『古尊宿語録』中華書局 1994 年 P 59)

書類にある法と概念かつ観念てきな法はともに月を指す指のことであり、最終的には心地を目指す。その心地の法とは「目前現用」にしたものである。これで仏法教義の終極てき価値は「玄学化」される危険から守り、私たち人生と生活の現実と結びつけるのである。臨濟禪師は遠慮なく概念的に法を理解するのにとどまって、それを生命の中に生かせない修行者を次のように叱った。「今時の学者は、総べて法を識(し)らず、猶お触鼻羊(そくびよう)の、物に逢著して口裏に安住するが如し。奴郎(ぬろう)弁ぜず、賓主分かたず」(『古尊宿語録』中華書局 1994 年 P 59)。もし、あらゆる宗教の初心は人の心を導き、人々の生活に関与しようとするれば、「執指廢月」という指に執着し月を廢する偏差はたぶん総ての宗教にあらうと思う。

神異は宗教神聖性になる要因である。仏教では「神通」「感応」という。教理によって、仏には六種類の神通がある。臨濟禪師がこの六種の神通に対して自分なりの解釈を次のようにした。

「夫れ仏の六通の如きは然らず。色界に入って色惑を被らず、声界に入って

声感を被らず、香界に入って香感を被らず、味界に入って味感を被らず、触界に入って触感を被らず、法界に入って法感を被らず。所以に六種の色声香味触法の皆な是れ空相なるに達すれば、此の無依の道人を繫縛(けばく)すること能わず。是れ五蘊の漏質なりと雖も、便ち是れ地行の神通なり。」(『古尊宿語録』中華書局 1994 年 P64)

臨濟禅師の「地行神通」が「神通」を生活の中に取り戻してくれた。刻一刻も目耳鼻舌身意と色声香味触との結びを命の中における最大な奇妙とする。これこそは仏法の照らしたところであり、修行者の用心するところでもそのある。最大な奇妙は日常にある。

「道流、仏法は用功(ゆうこう)の処無し、祇だ是れ平常無事。屙屎送尿、著衣喫飯(じゃくえきっぱん)困(つか)れ来れば即ち臥(ふ)す。愚人は我を笑うも、智は乃ち焉(これ)を知る。」(『古尊宿語録』中華書局 1994 年 P 59)

三

臨濟禅師の智慧はまさに禅宗てき智慧の精粹であり、仏教そのものまたは他の宗教にとってもよい示唆があると思う。

宗教は創立の初心に背き人々の自我に投射されるとき、自我の欲求実現の道具になりがちである。人々は宗教を道具として使いたがっているかもしれない。それは宗教のアピールパワー、組織力、扇動力が大きいからである。人々の欲望或いは恨みの中に宗教の神聖なるコートをかぶると、その破壊性も恐れるほど怖い。今日の世界の平和を脅威する宗教の極端主義を観察・思考すると、それは宗教の異化から発端したのだと分かった。宗教の異化を感得・防止するには智慧が必要となる。だから、臨濟禅師の智慧は大切なもので、時代的な意義を持っていると言えよう。

2016 年 8 月 10 日

(翁建文 訳)